

Book Review

顎関節症 セルフケア指導ハンドブック

顎関節症 臨床医の会 編

● ● ●

Reviewer

丸森英史 Hidefumi Marumori
(神奈川県・丸森歯科医院)

A4 判変, 140 頁
オールカラー
定価 (本体 9,000 円+税)
医歯薬出版刊



「顎関節症」への対応を悩んでいる歯科医に、まずお勧めしたい書籍である。

特に注目したいのは病態の捉え方が単一の病因論でなく複合的な病態であること、医学モデルだけの理解でなく広い視野で捉えること、の必要性を説いている点である。さらに、保存療法が優先されること、これらの指摘はカリエスや歯周病の理解にも共通することだと感じられる。歯科疾患の病因論のパラダイムシフトの流れを感じるところである。

抜く、削る、詰める等の介入処置で成果を積み重ねてきた歯科の大きな変換点にある時代なのであろう。黙々と技術向上に流れやすい歯科医への、重要なメッセージと感じられる。とかく「介入して何とかしようとする」歯科医の性を、「ちょっと待て」と気付かされる内容である。

顎関節症の治療では、補綴的な治療や外科処置が積極的に行われていた時代があった。その時代を見てきた立場からすると、本書の内容から顎関節症への対処はかなり変遷があったように

思う。今、顎関節症の病態をどのように理解すべきか、なぜセルフケアが必要なのか、細かく具体的に解説されている。

セルフケアとはいっても、詳細な病態のアセスメントがあつてのうえである。心理面や認知行動療法、運動療法なども含めた幅広い視野からの評価を解説されているのは、セルフケアの裾野の広さを考えさせられる。

アセスメントの大事さもさることながら、その情報をいかに効果的に患者さんに伝えるかのコミュニケーションの具体的な方法論が必要であり、それも詳細に解説されている。本書の大きな特徴である。具体的な患者さんへの情報提供の媒体が添付され、本書を教材に使いながら、患者さんにお話ができる構成の工夫はありがたい。

このコミュニケーション力が、これから歯科医にますます求められるとの指摘は重い。そのためには、論理を学ぶだけでなく日々臨床を振り返りながら向上することが必要であるが、歯科衛生士とともにそのスキルを向上するための具体的な方法は、これからの課

題であろう。歯科臨床全般に関わる課題である。

患者さんが20年近く通院してくると、その方の人生の節目をともに伴走することになる。そのなかで、顎関節症様の症状を訴えられることはよくある。本書の指摘の通りに生活環境からのストレスと思われる状況が、お話を聞くなかで浮かんでくることもある。患者さんとお話をするなかで症状が解決することは、たしかに体験する。本文を読み通すなかで、その構造的仕組みが明確に整理できる。しかし、うつ病などの精神医学的な見立てがほしいこともあり、さてどなたにお願いしたら良いかなど、これからの課題も感じられる。

ハンドブックとはうたっていても、顎関節症の全体的な概念把握ができるように、章立てなどに工夫されているところも、本書の特徴の一つである。運動療法やスプリント療法にもふれている。顎関節症の理解のために、まず初めに選択されるのに適した書籍として紹介したい。